

自閉スペクトラム症の各症状とワーキングメモリーが 結論の飛躍バイアスに与える影響の検討

○池田裕太郎¹・大野紗季¹・林愛美¹・横田万結¹・武田知也¹

(¹人間環境大学総合心理学部 総合心理学科)

問題と目的

Autism spectrum disorder(ASD)者が経験する社会生活における困難さは、対人交流場面だけでなく、意思決定場面においても生じる。ASD 者の意思決定の特徴として、拙速な判断を行う傾向を示す *Jumping to conclusions (JTC)* バイアスに着目された研究が行われている。しかし、先行研究における結果は一致しておらず、Brosnan et al(2014)では、ASD 者または ASD 傾向の高い人物の慎重な推論傾向が示される一方で Jansche & Hare (2014)では、ASD 者・児の拙速な意思決定の傾向が示された。不一致の要因として ASD の各症状の個人差及びワーキングメモリーが影響している可能性が考えられる。

本研究では ASD 者が JTC バイアスを有するか否かという先行研究の不一致を ASD の各症状およびワーキングメモリーの個人差に着目し研究することを目的とする。

方法

調査対象者 大学生 86 名の内、精神科へ通院しているものを除いた 84 名(男性 23 名, 女性 61 名)を対象とした。

評価尺度 (1)自閉スペクトラム指数(AQ):50 問で構成される ASD の特徴を測定するための自記式の質問紙である。(2)ビーズ玉課題: Brosnan et al(2014)や Jansche & Hare(2014)と同様のビーズ玉課題を用いた(Haq et al, 1988)。ビーズ玉課題は 2 色のビーズが 85:15 そして 15:85 の比率で入った二つの瓶を用意する。被験者からは瓶が見えない状態でどちらかの瓶からあらかじめ決まった順序でビ

ーズ玉を取り出す。そしてそのビーズ玉を被験者に提示し、どちらの瓶から取り出しているか判断できるかどうかを尋ねる。判断できないと回答した場合は意思決定するまでこの手続きを繰り返す。本研究では判断までのビーズ玉が 2 個以下のものを JTC バイアスを有するとした。また Jansche & Hare(2014)と同じように、ビーズの比率が 85:15 の *easy version* と 60:40 の *difficult version* を使用した。(3)ワーキングメモリー:ワーキングメモリーを測定するため、Ochoa et al(2014)を参考に、Wechsler Adult intelligence scale 3rd edition の順唱、逆唱、語音整列を用いた。

結果

JTC バイアスの有無を目的変数、AQ の下位因子得点、順唱、逆唱、語音整列を説明変数としてロジスティクス回帰分析を行った。その結果語音整列のみが JTC バイアスの有無を有意に予測していた。(*easy version*: $B = 0.28, p = .01$, *difficult version*: $B = 0.34, p = .02$)。

考察

語音整列のみが JTC バイアスの有無を有意に予測していた点から、JTC バイアスが ASD の各症状から影響されるのではなくワーキングメモリーの影響を受ける可能性が示された。またワーキングメモリーの中でも語音整列が順唱や逆唱に比べ、数字と仮名を分類したうえで並べ替えるという複雑な認知処理を行っている点から JTC バイアスがより負荷の高い認知処理と関連する可能性が示唆された。